

和 崎 春 日*
WAZAKI Haruka *



日本ーカメルーン往還の交流史

ー東京オリンピックから滞日アフリカ人まで

History of Frequent Exchange of Men and Cultures between Japan and Cameroon

ーFrom Tokyo Olympic Game to Recent Africans Coming to Japan

1 はじめにー1970年代の東アジア・ 日中韓（朝）のプレゼンス

私がカメルーンに初めて行ったときのカメルーンの世界状況から、述べよう。今から36年前の1976年に、私は、カメルーンに初めて足を踏み入れた。このとき、日本人や中国人あるいは韓国・朝鮮人はほとんどいなかった。カメルーンの人たちの東アジアへの意識は、高いものではなかった。カメルーンに日本大使館がまだ設立されていなかった時代である。在カメルーン日本大使館は、1987年によくヤウンデに建ったのである。だが一方、中国大使館はもちろん、韓国大使館も北朝鮮大使館も首都ヤウンデにすでにあった。カメルーンは賢明で、朝鮮半島の両国に等しい距離で外交を展開していた。このときの日本のアフリカに対する力のこもっていない構えに、まず驚いたのである。

ヤウンデの丘の上にある国立国会議事堂が中国の援助でできていた。1970年代の当時の日本は、中国にドネーションや円借款を供与していた。高度経済成長のあと金持ち国の仲間入りを果たしたところだった。それで、カメルーン人からは「ソ連はバルマイヨに病院を作った。ドイツはバフサンからフンボットまでの道を舗装道路にしてくれた。アメリカはフンバン郊外に大養魚場を作ってくれた。中国は首都ヤウンデに国会議事堂を建てた。フランスは何から何

までやりすぎるくらい手を出す。それで、日本は何をしてくれたんだい？」と問われた。経済的な大国の仲間入りを果たしていたとはいえ、カメルーンでは日本といってもそのプレゼンスは、大きいものではなかった。

ただ、モノによる周知はされていた。「メイド・イン・ジャパン」である。JVCやPanasonic、SONYの製品などは、市場にあふれ十分に知られていた。録音テープも、TDK製品などでジャパンが知られていた。カメルーンの人たちは、首都ヤウンデに着くとフランス語風の読みで、自動車やオートバイを見て「マード・イン・ジャパン」と呼んだ。このマード・イン・ジャパン製の自動車が疾風怒濤のように、カメルーンのモータリゼーションに押し寄せていた。今でも首都ヤウンデや経済首都といえる100万都市ドアラのタクシーは、黄色塗りの乗り合いタクシーで、日本車がほとんどである。これが、35年前には、ルノーやプジョーなどフランス車マジョリティから、一挙に日本車マジョリティへと変換しつつあったときだ。私の目にも、ヤウンデを走るタクシーの65ー70%は、TOYOTA、三菱、ダツツン（日産）、MAZUDA、などの日本車と映った。オートバイは、ホンダ、スズキ、カワサキなど、ほぼすべて日本製が走っていた。だから、カメルーンを「わが庭」だと思っている旧宗主国フランスやフランス人には、日本車の「横暴ぶり」が我

*中部大学国際関係学部中国語中国関係学科

慢ならなかった。確かに、入国審査のときのフランス人たちの堂々とした態度やその我が物顔ぶりは、むしろ「訴えるなら訴えてごらん」とか「捕まえてごらん」といった横柄さとして私には映ったくらいである。今でも、心理的に植民地化状況が生きている。自らの「庭」を荒らされたフランス人たちが、首都のホテルのカフェで日本人と思しき私を認めて「日本は車の本質で勝負せず、クーラーつきの安物自動車をダンピングで売って市場を荒らしている」と揶揄をこめて突っかかってきたくらいである。この時、「開発援助」で来ていたこのフランス人技師はカンボジア人助手を連れていた。フランスを中心とするカメルーン、カンボジアという植民地関係が生きていることを実感した。このように、人ではなく、高度の技術をもった工業製品によって、日本はその存在を知られつつあった。では人の交流はどのようなのだろうか。

2 日本—カメルーン関係

学術交流が関係を拓く

人的な交流では、何よりも学術分野の日本—カメルーン関係の交流が、政治よりも経済よりもどの分野よりも進んでいた。1970年代初めに、すでに東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所がカメルーンに学術調査隊を送り込んだ。その隊長が富川盛道教授（故人）であり、副隊長が日野舜也教授であった。その調査隊に率いられて、当時の民博の江口一久教授（故人）や端信行教授も、カメルーン北部のフルベ社会やドゥル社会に深く入り込んでいた。そのとき大学院生だった若い嶋田義仁名古屋大学教授や私が、ここで育てられたわけである。富川隊長に率いられた学術交流が、その弟子・和田正平隊長による国立民族学博物館カメルーン調査隊を生み出した。和田教授による博物館プロジェクトに関連した物質文化調査隊の組織化によって、端教授や大阪芸術大学の森淳教授（故

人）、井関和代教授、下休場千秋教授などのカメルーン研究が輩出されていった。吉田憲司教授も自らの民族学博物館プロジェクトでカメルーン研究に参加した。富川教授や日野教授がはじめてカメルーンにわたった1973年に、ちょうど時を同じくして、三井物産がチョコレート合弁会社 SOCACAO（カメルーンカカオ会社）設立を目指して、N 所長と技術者 H 氏 F 氏を派遣してきていた。日系の会社といえばこれだけであり、この当時の数少ない日本人である。

そして、東京外大 AA 言語文化研究所が、最初に研究の協力関係をもとうとしたのが、ONAREST である。Office National de la Recherche Scientifique et Technique 国立科学技術研究所である。この責任者、サミュエル・ドゥンベ・マンガ氏（故人）が日本に研究協力協定の調印のためにやってきた。当時のサッカーの社会人リーグのヤンマーの試合を観戦した。ヤンマーでネルソン吉村や釜本邦茂がプレーしていた時代である。ただサッカー情報は互いに知られておらず、日本がメキシコ・オリンピックで銅メダルをとったと聞いて、カメルーンのサッカー・レベルの高さを誇るドゥンベ・マンガ氏は、「腰を抜かして」いた。しかし、当時のカメルーンのサッカーのレベルの高さは、日本にはまったく知られていなかったが、こんなに強いのかと私などは、驚愕した。当時、日本、韓国、北朝鮮、中国が互いに競い合っていて、1対2や1対0などといった対戦を繰り返していたのだが、カメルーンを訪問した中国ナショナル・チームとカメルーンとの試合、そして、カメルーンリーグの優勝チームであるカノン・ド・ヤウンデとの試合は、ともに0対3、1対4という大差で、カメルーンが勝利を収めていた。さらに、1982年、カメルーンのトップ国立大学のヤウンデ大学の副学長アノマ・ングー氏（学長は大統領で副学長が実質学長）がアフリカ大学連合の副会長として、連合会長の

タンザニア・ダレサラーム大学学長とともに来日した。そして、私が一番若輩のカメルーン人としてンゲー博士を浅草・雷門など東京・下町や伊勢丹百貨店などに案内した。このことがカメルーンで、私の命を救ってくれることになる。後に、カメルーンでの調査をおえ首都ヤウンデの安宿でマラリアに発熱した私を、自ら医師であり厚生大臣になったアノマ・ンゲー氏は、自宅に連れて2週間看病して治療し救ってくれたのである。

カメルーンで混同される東アジア人ー日本・中国・韓国朝鮮

この頃のカメルーンの人たちからは、日本人ー中国人ー韓国・朝鮮人はみな同じように見えた。今でもそう見ている人は結構多い。カメルーン人たちは「日本人や中国人や韓国・朝鮮人は、みな近親婚を繰り返すのか？ みんな細い目の同じ顔をしている」と言って、両目の端を手で吊り上げる動作をしてわれわれに質問した。カメルーンの村に入っていくと、学校教育が普及していた若い世代は、東アジア3（4）国の違いを、教室や地理で習っていた。だが、老壮の世代のなかには、この3者を混同する人たちが結構いた。若年世代の人たちにとっても、教育でそう習っていたとはいえ、実感として日本人ー中国人ー韓国・朝鮮人を区別するのはむずかしかったであろう。むしろ、大人たちの言うことに、うすうす同感していたところもある。日本と中国が同じ民族ではないか、とどこか疑念をもっていたカメルーン人に、次のような出来事を見る機会が訪れた。

1977年、カメルーンの西部州・バムン県のフンバン近辺の村マゲンファに住み込んでいた私は、栄養補給のため、フンバンの街に出てきた。1ヶ月に一度くらい街に出て、安ホテルのレストランや町の安飯屋で、栄養補給をする。私は、フィールドワークのため、村のバムン家

庭アダムーさん宅に世話になって下宿していた。バムンの家庭料理や民族料理を毎日、1日2食の割合で食べていた。1日3食のときもあったが、まず2食が平均である。日本でも1日3食になったのは、ここ100年ほど前の近年のことである。夕食にはベンと呼ばれる練粥のような主食に一汁一菜がつく。ただもう1食は、朝か昼に蒸した芋類を食べたりして、簡便なことが多かった。これはこれで大好きなのだが、北側世界の飽食に慣れている私たちは、知らないうちに体力が落ちていたりする。フンバンは、街だけに、さすがに食堂や安レストランがいくつかあった。ボー・ルガールの古レストランで食べて路上にせり出したテーブルで、コーヒーを飲んでいた。すると、そこに、作業トラックが2台到着した。荷台には、それぞれ20人くらいが乗っている。よく見ると「日本人ではないか」と思い、体をせり出し挨拶しようとした。そのとき、トラックの荷台からも私を同胞と認めて、「ニーハオマー」という挨拶が飛んできた。

彼らのリーダー2人を私のテーブルに招び入れた私は、一緒にコーヒーを飲んだ。カメルーン地元のバムン人たちは、何が始まるのかと、私たちのテーブルの周りを10数名が興味深々に2重3重に取り巻いた。中国人たちは、フンバンの町から北方にいったところで、米作りの技術援助に来ているという。この協力グループの中国人リーダーたちは、フランス語を話せなかった。英語もまったく通じなかった。そこで、ノートと鉛筆を取り出し筆談を始めた。私は、自分を指で指示して、とにかく日本式の漢字で「我此処来訪民族文化研究」と書いた。すると相手はうなずいた。相手を指示しながら「汝、何処誕生」（この時、你という漢字が出てこなかった）と書くと、彼は「重慶」と書いた。さらに続けて「何目的協力」と私が尋ねると、彼は「犁」「米生産」と書いた。この間、我々はずっと無言で、ジェスチャーを交えながら、字

を書くだけで紹介しあった。私は「我日本京都誕生1949年」などと自己紹介した。この様子を見ていたバムンをはじめとするカメルーン人たちは、笑ったり驚いたりしつつ、日本人と中国人が、喋る言葉が通じない異なる民族だと認識したのである。

近年は、誤解を乗り越える、こうしたさまざまな契機が数多く増えている。日本からも、中国からも、アフリカからも、3者間のそれぞれへの来訪関係が極端に増えている時代である¹⁾。したがって、2者間に注目しても、こうした接触時の当初の誤解を乗り越える、カメルーン・日本双方からの具体的な体験・交流が増えてきた。その歴史を見てみよう。

日本ーカメルーンのスポーツ交流

まず、カメルーンが日本に登場したのは、1964年である。1964年に開かれた東京オリンピックに、カメルーンは、役員だけではあるが、正式に参加している。1960年が、「アフリカの年」と呼ばれて、多くのアフリカの国がヨーロッパ植民地からの独立を果たした年である。その独立直後の1964年に、建国の意気込みをもって、世界にお披露目をおこなったわけである。カメルーン代表は、4人だけではあるが、カメルーンの国旗を掲げて、代々木の国立競技場を堂々と行進した。

1987年には、女子バレーボールのユニチカ・チームがカメルーンを訪問し、親善試合をおこなってカメルーン・ナショナル・チームのレベル向上に貢献している。こうした交流の結果、カメルーンは、1997年にバレーボール女子でアフリカ・チャンピオンになっており、その後もアフリカではトップクラスの実力を保持するまでになっている。同じスポーツのサッカーの分野で、鳥栖フューチャーズの選手やガンバ大阪ついで東京ベルディで活躍した「エムボマ」選手が、カメルーンの名前を日本に大きく知ら

しめた。日韓ワールドカップ・サッカーのときも、「エムボマ」をふくむカメルーン選手団を受け入れた大分県・中津江村での日本ーカメルーン交流やさまざまな「混乱」が、カメルーンを日本により身近なものにした。この後、良く知る「エムボマ」をオーバー・エイジ枠として主力フォワードとキャプテンに据えたカメルーンチームは、オリンピックで優勝するのである。このことも、とにかくアフリカに関しては葛藤や混乱などマイナス情報が日本のマスメディアによって伝えられることが多いなかで、日本にプラスのカメルーン情報をもたらした。

日本ーカメルーン交流のために、そして日本ーアフリカ交流のために、日本社会が知っておくべきことは、カメルーンやアフリカの人名や地名の呼び方である。タンザニアにあるアフリカ最高峰キリマンジャロは、キリマ・ンジャロでンジャロ山という意味である。チャドの首都は、日本の教科書や地図にはヌジャメナなどと記されているが、正しくはNjamena ンジャメナである。日本の歴史の教科書によく出てくる、ガーナ独立の士で初代大統領「エンクルマ」は、正しくはNkurma ンクルマと呼ばねばならない。アフリカには、こうした[n]や[m]から始まる言葉が多い。そして、その発音は、「ン」「ム」とサイレントのように発して始まる。だから、[n]や[m]は、まず「ン」と発音されるように聞こえ、そう発音すれば通じる。カメルーンの都市では、Nkonsamba というバミレケの街があり、ンコンサンバと発音する。サッカーの大選手「エムボマ」は、Mboma Patrick で、「ボマ」か「ンボマ」と発音するとカメルーンでは通じる。人の名前を正確に発音しないで、こちらの都合で「エム」ボマなどと呼んでいるのは、失礼極まりない行為である。アフリカの人たちがどんな気持ちでその呼称を聞いているか、想像する必要があるだろう。日本のスポーツ・ジャーナリズムは、カメルーン人やアフリカ人の

名前をもっと正確に伝えるべきだ。在日カメルーン大使館の館員たちは、「フランスでもこう呼ばれている。ヒドイ話だ」とやはり憤激する。日本人と中国人を混同していたカメルーン人が、上記の両者の筆談の場面からその固定観念を是正していったように、私たち日本社会にいる者も、アフリカには [n] や [m] から始まる言葉が多いことを知って、そのまま当地の歴史・文脈にそってこれを尊重し、アフリカ流に呼称を改めていけばいいのである。一つずつ誤解や偏見を乗り越えていく。

カメルーン人の日本留学とカメルーンでの日系企業への就職

36年前（1976年当時）からしばらくして、日本の諸企業もカメルーンに来るようになった。商社は、国際貿易港を擁しカメルーンで最大の100万都市ドアラに住友商事と伊藤忠と三井物産、そして首都ヤウンデに三菱商事と住友商事（ヤウンデ店）があった。ドアラには小松製作所も来ていたし、各商社を統合する日本貿易振興会JETROのオフィスがあった。当時は、日本大使館はなく、ドアラのJETRO事務所の日本貿易振興会の代表が大使館業務を兼務していた。学術調査で行ったときも、日本人としてJETROに入国と出国の手続き書を提出した。その当時ドアラで最も古い歴史と威厳をそなえたホテル、アクア・パラスの裏のビルの3階に日本貿易振興会のオフィスがあった。飛行機は、パリからはカメルーン・エアライン、UTAの2社が、ロンドンからはブリティッシュ・カレドニアンが、ドアラ空港まで就航していた。まず首都ヤウンデの省庁に調査許可証などをもらいに行かなくてはならないから、ドアラからヤウンデ行きのカメルーン・エアラインに乗り継ぐのである。UTAは、旧フランス植民地の各地に、エール・フランスが先進国にという分担だった。が、のちにエール・フランスに

統合された。ブリティッシュ・カレドニアンもBOACに統合され、これが後にブリティッシュ・エアウェイズBAになった。

この当時、もっとも早く、カメルーンに経済進出した会社は、三井物産である。SOCACAOというチョコレート会社をヤウンデに合併で作っていた。1976年当時は、すでに工場の廃止、整理に動いたあとだった。そのときの日本人技術者は、盲腸炎にかかりパリへの移動が遅れて帰らぬ人となってしまった。今ヤウンデの旧飛行場近くにあるビール工場となった跡地のお墓に眠りながら、カメルーンにやってくる後進の日本人を見守り続けている。

ヤウンデには、もう一人ドイツ人医師ハーペラー教授についていた日本人の医療技術者・角田一蔵のお墓がある。角田一蔵のことを最初に紹介したのは、1962年に10ヶ月間ヤウンデの教員養成学校に派遣された数学教師・花岡松枝である²⁾。その角田のことを、青木澄夫がさらにその関連記録を追跡して記述している³⁾。青木は、墓碑銘に TSUNODA ICHIZOU, HAKONE とあること、1907年9月27日没、Schweizer Wasser Fieber（黒水熱病と直訳される）が原因でなくなったことを、説明している。省庁があつまる高台の街区の一角から、箱根出身の角田のお墓がやはり後進の日本人を見おろし見守っている。わたしたち日本からのカメルーン学術調査隊の日野舜也副隊長（のちに隊長）も、1969年、ヤウンデのこの角田のお墓詣りをしている⁴⁾。

その後、日本に留学していたカメルーン人たちが、次々にカメルーンに帰国し、日本ーカメルーンをつないでいった。経済活動で有名なバミレケ人のバンガンテ出身者たちである。正式には、バンガンテ横のバチングー首長領出身のチャグオ・ティモテ氏、フランソワ・シェーンホア氏、デュードヌ・クエジャ氏たちである。3人とももちろん日本語ができる。チャグ

オさんは、慶応大学大学院商学研究科の修士号をとって帰国した。カメルーン・ヤウンデの三菱商事に勤めた。そしてカメルーンにおけるカメルーン・ジャパン・ハウスの設立からカメルーン初の日本語コンテストの開催にまでこぎつけたのである（写真1参照：Cameroon-Japan House「カメルーン・日本の家」は、CRTV ディレクターのダンジ氏とティモテ氏たちの努力で設立の発案をおこない、日本滞在経験のあるカメルーン人を結集した）。シェーンホアさんは、早稲田大学の大学院をでて経済学修士号をとり帰国した。住友商事の現地法人SUMOCAに就職しヤウンデ事務所に就任した。クエジャさんも、早稲田大学の大学院を出て、経済学修士号をとって帰国し、ドアラにある伊藤忠商事に就職した。小樽商科大学で修士号をとって、BISIC というカメルーンの政府系銀行に就職した人もいる。この人も、バミレケ人である。このようにして、日本で学び日本語を修得し日本文化を経験して、これに馴染んだカメルーン人がどんどんと出てきたのである。

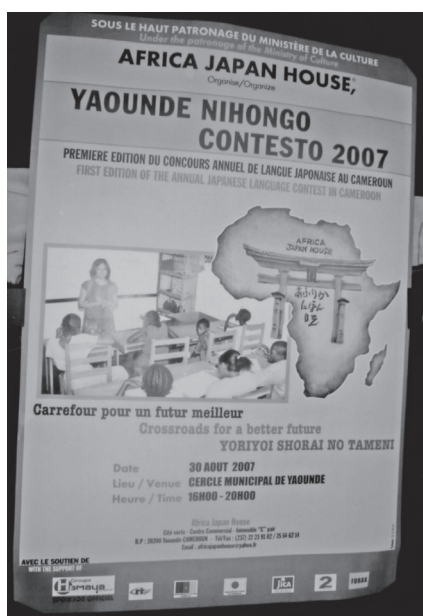


写真1

2007年に開催されたカメルーン初の日本語コンテスト

3 世界をネットワークにするカメルーン人—軽々と日本に寄りつく

在日カメルーン人協会の活動

今、日本にたくさんの「普通」の中流階層のカメルーン人がやってくる時代になった。大使館員の関係者や国連機関に勤める人たちなどのエリートだけではなく、普通の経済階層のカメルーン人が日本に来るようになってきたのである。そして、在日本カメルーン人協会という団体を組織するまでになっている。日本に長い期間いる在日カメルーン人たちや、2ヶ月の商売用のビザなどで短期に滞在する滞日カメルーン人たちは、ともにそのメンバーとなって協力し合っている。

2007年1月の第3日曜日、在日カメルーン人協会「アカジャ」(Association de Camerounais au Japon の省略形)の年次総会が、東京の郊外、埼玉県東武伊勢崎線の東武動物公園駅から車で15分ほどの県道沿いにあるカメルーン・レストラン Afro Wave で開かれた。丁度、会長任期の2年の節目で、アカジャ会長の改選をおこなうところであった。30名ほどのカメルーン人が、ところ狭しとレストラン・バーになっている小ホールのような部屋に集まっていた。詰めれば20人くらいは座れる。階段にいながら議論の進行を聞いている者や、中がはいっぱいなので表の通りにはみ出してアカジャの会に参加している者もいた。まず、席を立ち遠くカメルーンに敬意を表して、会は始まった。そして、現会長アントニー・フル・ンデが再選された。今年度の行事日程や、問題点の洗い出しなどが話しあわれ、在日カメルーン人協会の規約がフランス語版だけでなく、英語版を早急に作るべきだということで、意見がまとまった。

英語圏カメルーンからの在日・滞日カメルーン人が多い。英語圏カメルーンというのは、通称「西カメ」、つまりカメルーンの領土15%

ほどをカメルーン西部に占める地域を指し、ここから日本に来ているカメルーン人が多いのである (図1 参照)⁵⁾。フランス語圏カメルーンのバミレケ地域から来た人たちが、最初の交流期の先陣をきったが、その後は、様相を変え、西カメルーンからの来日が極端に多くなった。そのなかで、まず拠点とするのは、西カメルーン最大の都市バメンダである。バメンダは、カメルーンのなかでドアラ、ヤウンデ、バフサンに次いで、人口20万人ほどが居住するカメルーン第4位の人口を誇る都市である。

実は、このバメンダは、一つの文化にまとも

っているのではなく、カメルーンの文脈や西カメルーンの社会文脈で言うと、4つの伝統的「政治・文化」単位からなっている。それは、4つの王国である。バフツ王国、ンクウェン王国、バリ王国、マンコン王国の4つである。バメンダの街は、市場などバメンダの街の中心からそれぞれ4つの王国に向かう距離で、市内のそれぞれの街区を、ンクウェン・マイル1とかンクウェン・マイル4とか呼んでいる。

日本に来ている西カメルーン出身者は、まず「バメンダから」と言う。だが、かれらの心層にある文化の実態としては、この4つの王国の

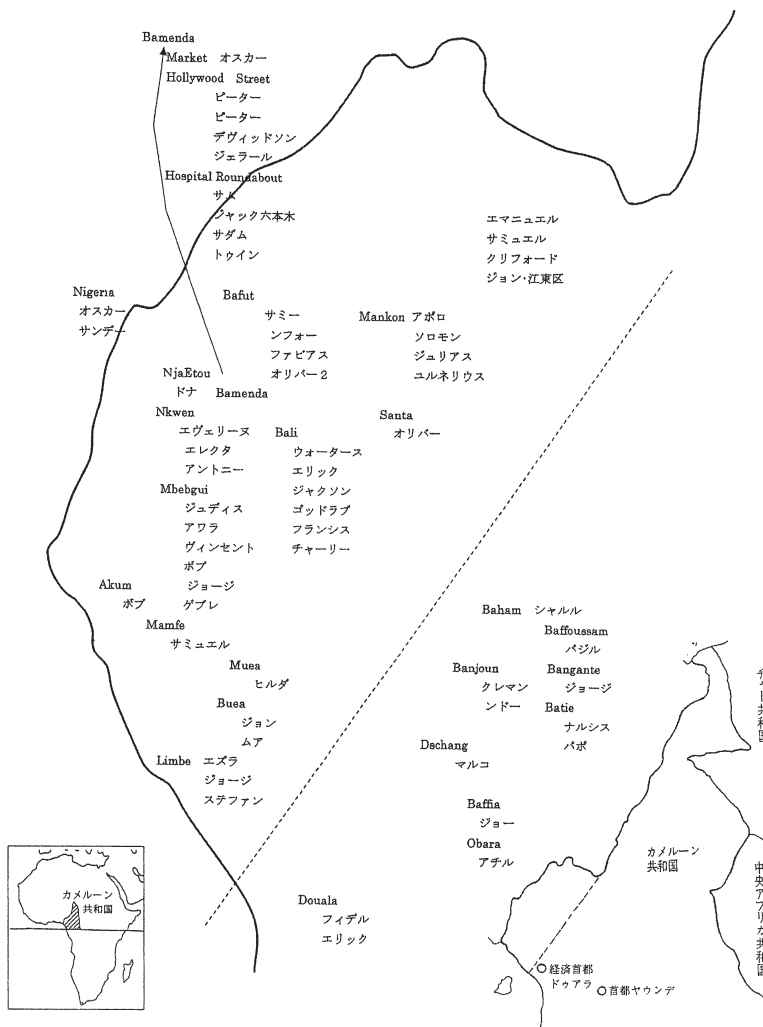


図1 滞日カメルーン人中古自動車業者の出身地

どれかに「所属」している。アイデンティティが異なる。バメンダには、バメンダから東北方向の山岳地帯を登ったところにあるオクの集落から来ている人もいる。ただ、日本にはオク出身の人は、まだ来ていない。だから、日本に渡る情報取得も日本での協力扶助の形も、基本的には、まずこの同一王国における相互扶助ネットワークがものを言う。したがって、紹介幹旋のルートも、4つの王国をそれぞれ単位としてなされることが多く、同時に、その責任の取り方も、4つの王国文化単位で責任を負うことが多い。また逆の方向で、就職や経済チャンスを求めたり、日本の情報を集めたりするのも、まずカメルーンでの親近性や言語・文化の同一性から頼って、同一王国の人からその糸口を探ることが多い。

こうしたことから、在日カメルーン人協会では、会長のもとに、副会長ではなく4人の幹事を置いている。会長アントニーは、マンコン王国出身である。なので、幹事は、マンコン王国以外から選出される。4人の幹事では、まず、ンクウェン王国出身のエレクタである。ついで、バフツ王国出身のサミュエル・ンディフォールである。そして、バリ王国出身のゴッドラブである。あと一人の幹事は、英語圏の4王国は既に充たしたので、残るフランス語圏のカメルーンからで、バンガンテ出身のバジルである。このように、カメルーンの主要な土地を押さえ、できる限り抜け落ちる部分がないように、幹事の人選でも広く網を張っている(図2参照)⁶⁾。こうして、日本におけるカメルーン人の生活動態は、日本のなかの要素で決まることもあるが、カメルーンの政治・社会・文化状況がこれを規定しているのである。つまり、日本におけるカメルーン人の生活は、カメルーン的生活文化の諸条件と連動しているのである。

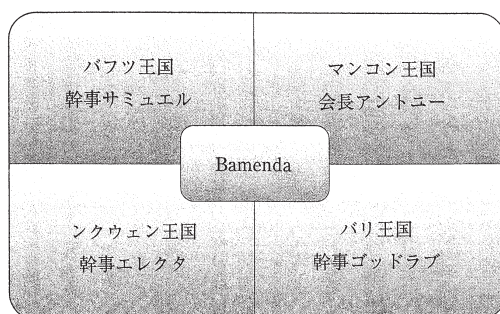


図2
英語圏最大都市 Bamenda の政治構造

多様な滞日カメルーン人像

こうして、日本にいるカメルーン人たちの相互協力を旨とするアソシエーションができるくらいだから、多様な層の多様な出身のカメルーン人たちが、日本に來ているということである。その実像は、どうなのだろう。

まず、バフツ王国出身のサミュエル・ンディフォールは、きわめて文化的な接触と機縁から、日本にやってくる。サミュエル(40歳)は、英語圏出身であるのに、大学はフランス語圏のカメルーンの「トップ大学」といわれるヤウンデ大学である。英文科を卒業した。その後、演劇に関心を寄せ、ヤウンデ大学の演劇芸術専攻の大学院修士課程に進みこれを修了した。カメルーンでは、国民芸術文化祭などで俳優および演出家として活躍していた。1999年、カメルーン国際映画祭を訪れた国際演劇協会日本支部の小田切副会長に会った。翌2000年8月に、日本国際演劇協会の招きで日本を初めて訪問した。ここで、能・狂言のワークショップに参加している。そして、各国から集まった俳優をまとめ、音楽、舞踊、身体芸術、オーケストラ、歌などを総合して、『唐人相撲』の作品が演じられた。このとき、演出家・野村万之丞に出会い、野村を恩師とまで尊敬するようになった。2004年には野村のプロデュースで『復元・阿国歌舞伎』を演ずることになったが、このとき、恩師・野村万之丞が急逝した。このとき以来も、

能・狂言への情熱を持ち続け、カメルーン公演を成功させるまで、カメルーンに日本の古典芸能を紹介することに情熱を燃やした。こうして、憧れの日本に滞在するようになったのである。今は、東京で、高校の英語教師をしている⁷⁾。

こうした文化的な交流もあるが、もっと汗まみれの労働を求める訪日もある。中古自動車の売買から、日本通になっていった者もいる。それは、同じバフツ王国出身のサミュエル・シュー・アボンである。サミュエル（通称サミーで呼ばれている）は、1980年代はじめ、西カメルーンに入った端信行民族学博物館教授（当時）と森淳大阪芸術大学教授（故人）とバメンダで出会った。このときは、一介のタクシードライバーだった。「クルス」といってタクシーを長い時間レンタルすることがある。丸一日借切りということもある。こうしたとき、端教授や森教授は、運転手の資質や素行や誠実さを、見定めている。何人か雇った運転手のなかで、誰が信頼に足り、今後のレンタルに値するかを見定めているわけである。このとき、サミーは、バメンダから少し行ったマンコム首長領で、夜の食事を共にし、端教授たちと語り合った。若きサミーは、今恋人がいるが、お互いの人となりを知り合い、深い心の交流に到達できるまでは性的な交流に走らないという信念を語ったのだった。サミーは、快活で開放的な行動様式が目立つとうつるアフリカ文化のなかにあって、自省と自制を効かし、マックスウェーバーで言えば「プロテスタンティズムと資本主義の精神」を持っている若者であった。1年後バメンダでサミーに出会うと、サミーは、もうすぐで中古車を買えるくらいまで貯金があった、と言った。2年後にバメンダに行くと、自分のタクシーを運転していた。3年後には、2台のタクシーを持って運転手を雇っていた。5年後には、およそ10台のオーナーになっていた。10年後には、日本にパーツや中古自動車を買付けに

くる貿易商になっていた。15年後には、ガソリンスタンドも経営する実業家になっていた。そして、バメンダタクシー協会会長にもなった。こうした実業の成功を認められたサミーは、この地の伝統社会にとっても見過ごせない人物となり、バフツ王から重臣のタイトルを与えられバフツ王国博物館館長に任命されるまでになった。観光化をにらんだ時勢で、日本と深い交流をもちベルギーにも買い付けに行くサミーは、バメンダ地域社会にとって欠くことのできない人物と認められるまでになったのである。

2007年3月、国立民族学博物館で吉田憲司教授のもとで開かれた博物館ネットワークの国際会議に、南アフリカ、ナイジェリア、ザンビアの博物館長とともに、カメルーンの民族博物館代表としてバフツ博物館長サミュエルが招待された。この開催期間中、カメルーンでは、自動車税の高さに不満が溜まっていた自動車業、運輸業関係者が、バメンダやヤウンデ、ドアラなどカメルーン各都市でデモ行進の示威行動が起こっていた。そして、バメンダでは混乱のなかで10人以上の死傷者がでた。この事態のため、バメンダタクシー協会会長であり、当時カメルーンタクシー協会会長になっていたサミーは、本国に帰ると逮捕され生命の危険さえ被る危険性が高くなって帰国を断念した。そして、日本で亡命申請をして今、就業ビザが出るまで居住を認められるまでになった。今、大阪の自動車解体工場で働いている。中学校で英語を教えるようにもなった。そして2012年、日本政府による職業斡旋プログラムの参加を果たし、次なる日本定着化のステップに入ろうとしている。家族と離れ離れになって日本で永住を覚悟するカメルーン人が出ている日本ーカメルーン交流時代なのである。

サミーのように、日本ーカメルーン交流史の生き証人のような人がいるが、こうした交流を基盤として、「普通の」カメルーン人が多数、

来日する時代になった。留学生も増えた。横浜国立大学、太平洋立命館大学、東京工業大学、大阪外国語大学（現・大阪大学）、など、かつて実績のあった早稲田慶応以外の多数の大学への留学が増えた。在日カメルーン人協会のジャン・ケンネ初代会長は、東京工業大学に留学し、ここで博士の学位をとり、日本—カメルーンを数度往復した後、現在は同大学の客員教授である。こうした日本の大学へのカメルーンからの留学も、上層階級の子弟ではない普通の中下層の家庭の子弟が、自分の努力によってスカラシップを得て、日本に留学してこれるようになった。

一般カメルーン人では、中古自動車やパーツのビジネスに係わる者が多い。上記のバフツ王国出身のサミーが先鞭をつけ、その直接・間接の情報を得て、多くのカメルーン人たちがやってきている。東武伊勢崎線の埼玉県から千葉県にかけての沿線には、多くの自動車解体工場やヤードがある。ヤードとは、中古自動車やパーツを置いておいたり、解体作業をしたり、コンテナを運んで運搬作業をしたりするところである。西カメルーン・ンクエン王国出身のエレクトが東武動物公園駅から車で15分ほどのところで、自動車解体工場を開いている。カメルーン人が常時、10人～20人働いている。買い付け商人と解体作業や運搬作業をしている者がいる。カメルーンから買い付けに来る者は、2ヶ月の商売用のビザを取って、解体工場のなかにあるプレハブ簡易宿泊棟で寝泊りする。1棟に2段式簡易ベッドが2つあり、シングル・サイズだがこれに男2人が寝泊りしている者もいる。2棟あるから、最大16人泊まれる。そして、越谷や蕨など埼玉県、千葉県、茨城県にあるオークション会場に中古車の買い付けに走りまわる。解体作業や運搬労働をするカメルーン人たちは、千葉などに住み、そこからここに通ってきている。日本人女性と結婚した者を除

くと、オーバーステイ状態になっている。解体工場のカメルーン人労働者は、1日1万円で働く。月に平均15万円ほどの収入であるという。

オークション会場では、100ページ大の販売中古車の情報がかかれた冊子3冊ほどを、あらかじめ入手できる。USCなどオークション会社の送迎バスが最寄の駅で待っている。このオークション会場に行く小型バスのなかで、情報冊子が無料で全員に配布される。これを見ておいて、購入目標を定める。カメルーンでよく売れる車種は、アフリカ各地でも良く売れ、その価格は高くなる。トヨタのハイエースは、アフリカ各地で公共交通としても利用が広く、人気が高い。また、トヨタ4ランナー（日本名はHi Lux）もスポーツタイプで、経済的に成功した者たちに人気が高い。オークションでは、テレビ画像に順次、中古自動車が映し出され、これをボタン操作で値段を提示して最高額を提示した者が購入する仕組みである。カメルーンから2ヶ月商用ビザで着たオリバーは、トヨタ4ランナーを50万円で落札した。これをカメルーンに搬送して、日本円でいうと180万円で売って利益をあげた。

カメルーン人中古車ディーラーたちは、2ヶ月の間に、自動車3～4台、あとは自動車パーツや電化製品、パソコンなどを購入し、コンテナ2台から多いときに3台程度で、横浜港からカメルーンのドアラ港に輸送することが多い。2ヶ月でカメルーンに着く。コンテナには、20トン積める20フィート・コンテナと30トン積める40フィート・コンテナがある。購入した物の値段によるが、部品購入費や輸送代等で250万円支払い、カメルーンでおおよそ350万円から400万円で売る計算になる。1台のコンテナで100万円～150万円ほどの利益を出すということである。カメルーンで公務員や大学教授の月給が日本円で6万円ほどだと考えると、この額の大きさが分かる。

利益を大きくするためには、安く、できればただ同然で買い、高く売ればいい。そのため、危険を冒す者は、盗難車に手を出してしまう。極端に値段が安くなるからだ。カメルーン人2名がパトカーの追跡を受け、高速道路の橋げたから飛び降りて一人はなくなり一人は重傷を負うという事件も出てしまった。このため、在日カメルーン人会アカジャでは、寄金を出し合って200万円を集め遺体のカメルーン搬送をはたしたということもあった。危険を冒してまで、日本にビジネスチャンスを求めに来ているカメルーン人がいるということである。

むすびー日本と世界でたくましく生きるカメルーン人

滞日カメルーン人は、たくましく生きている。カメルーン人女性もたくましい。越谷市のアフリカン・レストランで料理人兼ウェイトレスとして働くドナがいる。ドナは、西カメルーン英語圏のジャーエトゥ村出身である。ここからベングイにあり全寮制の英語フランス語バイリンガル高校でフランス語を学び、カメルーン第4の大都市で西カメルーン最大都市のパメンダに出る。そして、英語圏ナンバーワンのブエア大学に学んで学士となり、日本にやってきた。六本木のカナダ人の家でお手伝いさんとして働くエズメもいる。敬虔である。日本で私たち日本人と昼ご飯を都心のレストランで食べるときも、祈りを欠かさない。毎日曜日の教会通いをもろろん続けている。カメルーンに持って帰るお土産も、日本の本屋で購入した英語で書かれたキリスト教学の神学書である。カメルーン大使館が日本にまだ立っていなかったときから、池袋でレストランを開いているジュディスもいる。ヒルダは、エレクトアが開くカメルーン料理店でウェイトレスとして働いている。大分の太平洋立命館大学留学中に、ドアラに住む母が日本にやってきて一緒に住み始めたため、急遽、

稼ぐために埼玉のアフリカン・レストランに働きにきたモニカもいる。「ピンク街」と言っているような怪しげな六本木ビルのバーでウェイトレスとして働くトレイシイもいる。日本の多様な場所で多様な形でカメルーン人たちが、居つき働いている。限られた経済層による少数のカメルーン人ではない、そういう一般カメルーン人の絶対量が日本ーカメルーン関係を厚く支える交流の時代になっているのである。熊本ユニセフは、毎年6月から7月に「アフリカ子供の日」を開催し、アフリカ各国大使を順次熊本に呼んでシンポジウムを開き、日本とアフリカの関係をより強固にしようと模索を続けてきた。もう第20回、20年の歴史を重ねた（写真2参照）。この時に、同じ九州からということで、大分の太平洋立命館大学に在学中の多くのアフリカ人留学生が参加する。このなかに、カメルーン人学生も毎年2－3名は必ず含まれる時代になった。分厚くなりそうな交流が始まったから、その分、見えていなかった矛盾や非整序や未整備も見えてくる時代ともなった。そして、その矛盾がまだまだ多いとも言える。とはいえ、片務的で一方的（unilateral）な日本ーカメルーン関係ではなく、双方向的（bilateral）で対等・平等な関係の芽生えが、アフリカと日本の間に生まれつつある。やや掛け声だけ浮いているよ



写真2 熊本ユニセフ主催「アフリカ子どもの日」には、全国から多くのアフリカ人が結集する。

うにも感じられる、新しい日本—アフリカ関係の外交用語 NEPAD の New Partnership という対等関係を実質化する、日本・カメルーン双方の民衆の動きが急増し活発化している現代の状況が、いま認められる。そして、それがさらに、中国に來住するカメルーン人・アフリカ人の活動を他稿で論じたように⁸⁾、日中アフリカの3極をふくむ多極的 (multilateral) な関係へと進んでいる複合的な越境状況が認められるのである。「グローバル」などという言葉の浮つきに乘るのではなく、今後、こうした日々を食い詰めても生きる民衆の越境活動の考察から、今日の世界状況を動的に捉えていくことが必要だと考えている。これが今後の課題である。

【注】

- 1) 和崎春日・田淵六郎「來日カメルーン人の母村・家族状況—來住アフリカ人の母国における家族の社会・経済状況」『スワヒリ&アフリカ研究』第17号、2007年、117—144頁；和崎春日編著『來住アフリカ人の相互扶助と日本人との共生に関する都市人類学的研究』名古屋大学文学研究科、2007年、参照。
- 2) 花岡松枝『失われゆく樂園—terre d'avenir 3カメルーン紀行』実業之日本社、1963年、103—105頁。
- 3) 青木澄夫は、カメルーンはじめアフリカと日本との交流の歴史を丹念に追いかける労作を精力的に発表している（青木澄夫『日本人のアフリカ発見』山川出版社、2000年、参照）。
- 4) 日野舜也は、角田の死亡年を1914年とし、その原因をキニーネによる副作用のためと記している（日野舜也『アフリカの小さな町から』筑摩書房、1984年）。
- 5) 和崎春日「中古自動車業を生きる滞日アフリカ人の生活動態—カメルーン人の生活戦略と母国の政治社会状況」『地域研究』Vol.9, No.1、京都大学地域研究統合情報センター、昭和堂、2009年、260—278頁、参照。
- 6) 和崎春日「産業人類学、都市人類学、超国家の人類学をつなぐもの—滞日アフリカ人の生活動態から十時厳周の「混乱と境界侵犯の人類学」を見る」『法学研究』第84巻第6号、慶應義塾大学法学研究会、2011年、209—234頁、参照。
- 7) 和崎春日「滞日アフリカ人のアソシエーション設立活動と集会行動—滞日カメルーンの協力ネットワ

ークと階層性」『名古屋大学文学部研究論集』史学54号、2008年、1—19頁、参照。

- 8) 和崎春日「アフリカへの中国人と中国へのアフリカ人—山本節の境界思想から越境を考える」『神話・象徴・図像 I』篠田知和基編、楽瑯書院、2011年、369—385頁、参照。